

欧米女性が見た明治期の日本： 日本女性観を中心に

梅 本 順 子

Junko UMEMOTO. Under Western Female Eyes: Images of Japanese Women in the Meiji Period. *Studies in International Relations* Vol. 33, No. 2. February 2013. pp. 23 – 33.

After the Meiji Restoration the number of Western women visiting Japan increased. Some were missionaries and educators invited by the Japanese government, others accompanied family members on visits to Japan. In this article I discuss the works of three such women: Julia D. Carrothers, a missionary's wife; Alice M. Bacon, the teacher invited by Umeko Tsuda; and Isabella L. Bird, the adventurous traveler. Their impressions on a variety of Japanese women were recorded in the books they wrote, and they held similar opinions on topics such as marriage, home, children, education and male-female relationships. Occasionally, all three appear prejudiced due to a confidence in Western civilization. But their writings also show that they began to question the assumption that to civilize means to impose an Anglo-Christian culture on those they encountered.

はじめに

欧米人にとって未知の国であった日本は、ペリーによる開国からわずか15年足らずで、明治という新しい体制のもと近代化に邁進していた。欧米の来訪者は着実に増えてきたが、明治中期までに来日する女性という、外交官の妻、キリスト教伝道局による派遣の宣教師、あるいはその妻という肩書を持った人々に限られたといっても過言ではない。そうでなければ、強い目的意識を持って来日したごく少数の人々であった。よって、そのような西欧女性が残した日本論には、男性のものとは異なる視点からのものが含まれているのではないだろうか。とくに、その時代に来日した女性だからこそ観察できたことがあるだろう。

本稿では、明治初年から中期にかけて来日し、女性の視点から日本社会を見つめた欧米の三女性による日本論を概観する。三人は、来日理由をはじめ、国籍、年齢、また滞在期間など異なるが、彼女らの父親は全員キリスト教の牧師であり、そのうちの一人は夫も宣教師であった。その三人とは来日順に、ジュリア・カロザース (Julia D. Carrothers, 1845 – 1914, これ以降は夫と区別す

るためにジュリアとする)、イサベラ・L・バード (Isabella L. Bird, 1831 – 1904, 1回目の来日後結婚したため、ビショップ夫人を名乗ることがあるが、これ以降はバードとする)、そしてアリス・ベーコン (Alice M. Bacon, 1858 – 1918, これ以降はベーコンとする) である。ジュリアとベーコンはアメリカ人、バードは英国人である。

来日理由は、ジュリアは宣教師の夫の赴任に同行したものの、あとの二人は自分の意思での来日だった。旅行家としてのバードは日本各地の探訪のため、ベーコンは日本の女子教育のために旧知の津田梅子や大山 (山川) 捨松らの要請に応えたものだった。

ジュリアを除いては、積極的には日本人の改宗に関わる意図はないものの、ことあるごとに彼女らの所属するキリスト教社会と比べて意見を述べていることは否定できない。先にも触れたように、外交官以外の来日は宣教師が多かったことからすれば、日本滞在という稀有な体験をする女性が、キリスト教関係者とつながっていても、何ら驚くにはあたらないものの、彼女らのまなざしの先には、キリスト教の恵みを受けていない発展途上の国民に対する視線を感じさせる記述が目立つ。

当時は日本に滞在する外国人の数がさほど多くなかったせいか、来日者や滞在者は互いに知り合いになることも多かったようである。ちなみに、1875年に14歳で父親ウィリアム・C. ホイットニー (William C. Whitney, 1825 - 82) の教師としての赴任 (日本初の商科講習所、一橋大学の前身) に同行して来日したクララ・ホイットニー (Clara Whitney, 1860 - 1936, 勝海舟の三男梅太郎と結婚したものの、離婚して二人の間にできた子供とともに帰国) は、1875年から87年までつけた日記 (*Clara's Diary: An American Girl in Meiji Japan*, 1979) に、ジュリアとバードのことを記している。9人の寄宿生を抱えるジュリアが教会ではオルガンを弾き、夫カロザースの説教を手助けするようす (1875年10月21日付) や、誰彼構わずに出会った欧米人から日本に関する情報を集めようとした老嬢 (very disagreeable old maid) のバード (1878年10月3日付) などが描かれている。来日順に従い、ジュリア、バード、ベーコンと三人の見た日本人像、特に日本女性に関わる箇所を、「結婚」、「家庭」、「子供」、「教育」、「男女関係」という視点から検証する。

ジュリア・カロザースの場合

最初に、ジュリアの日本論である『日が昇る王国』(正式名は *The Sunrise Kingdom; or, Life and Scenes in Japan, and Woman's Work for Woman There*, 1879) の背景から見てゆく。

彼女の来日理由は、宣教師である夫の日本赴任である。1869年、来日2カ月前に結婚したジュリアは、夫であるクリストファー・カロザース (Christopher Carrothers, 1839 - 1921) と共に日本の地を踏んだ。彼女が教育に目覚めたのは、夫の日曜学校開始に伴い、青少年のクラスを担当したことに遡る。また、1870年10月には築地に宣教師館が新築されたことから、地番としては6番A棟 (ここが後に彼女の教える学校の名称になる) に入居し、日本での生活が始まったのである。心身ともに不調であったジュリアは1871年の2月よりちょうど1年ほど、いったんはアメリカにもどるものの、1872年には再来日を果たし、これ以降、

夫が同僚のタムソンと対立して宣教師の職を辞する1876年まで築地で教師をしながら過ごした⁽¹⁾。

その後、住み慣れた築地の宣教師館をあげ渡すために教職から離れ、文部省のお雇い教師となった夫の赴任地の広島に同行するが、1878年には一人でアメリカに帰国した。それ以降は、夫が宣教師に復職すれば自分も再来日を果たそうと、伝道本部に夫ともども働きかけをしたようだが、ついに夫が宣教師に復職することはなかった。ジュリアは教職に関して強い意欲をもっていたものの、結局離婚に至ったのであった。

そんなジュリアが、1年の空白期を除いても8年に渡る日本滞在の出来事をまとめたものが、先に触れた『日が昇る王国』である。この本は、Book IよりBook IVまで四部分に分かれており、それぞれが数章からなる。Iのみ詳細な小見出しがついており、年ごとに日記のような体裁で、日常の体験を述べている。Book IIやBook IIIになるとIのような小見出しは消えるが年代は残り、相変わらず日本人学生との交流が描かれている。しかしBook IVになると、見聞記録や体験というよりは日本社会を改革するために宣教師がすべき使命をはじめ、日本の成り立ちから政府の方針など、未知の日本について後輩に必要な知識を講じるといった主旨のものまでみられる。

気になるのが、実際にはアメリカに帰ってしまっているはずの1871年の日付が「富士登山」等の出来事に割り当てられていることである⁽²⁾。他者の体験から得た一般論として見るにはかなり詳細に報告されており、ラザフォード・オールコックの『大君の都』にある富士の章やラフカディオ・ハーンの『異国情趣と回顧』に収録されている「富士の山」と比べても遜色がない。おそらく、彼女は実際に登山を体験した身近な人から聞いた内容をまとめたのではないか。健康に問題があるジュリアが自分で富士登山したとは到底考えられないからである。女性としては英国公使パークスの夫人が富士登山をすでに成し遂げていたことからして、ほかの欧米人もそれに続いたと想像される。

ジュリアたちが来日したころ日本ではキリスト教が解禁になっていなかったことから苦労も多かった。そのような中で、始めは夫を支えるだけだっ

たものが、婦女子を教え始めたことから、次第に教師という仕事の意義に目覚めてゆく様子が、日本人の教え子との触れ合いからうかがわれる。この後触れるバードやベーコンとも共通するが、その視点は日本女性、時には子供が置かれた状況に向けられた。ジュリアの場合、自分が携わった教育を通して眺めた日本社会やその制度の問題点を語っている。

ジュリアは、まず日本にある妾の制度に反対し、幸せな家庭をつくることを主張する。日本語はフランス語のように英語の“home”にあたる訳語がないという持論を展開する⁽³⁾。住居としての「家」とその内側にある「家庭」の区別への強いこだわりがあった。後に、宣教師のみならず日本のキリスト教徒たちも日本に「クリスチャン・ホーム」を創ることを目標として掲げるようになったが、ジュリアのこの発言もそれにかかわっていると考えられるだろう。

さらに、日本の結婚のあり方、即ち幼年期に親同士が決めた相手との結婚や仲人による結婚制度を批判する。ジュリアに限らず、それ以降の多くのキリスト教徒も異口同音にいうのが、愛を感じることなく行われる結婚の実態である。そのような結婚は、多かれ少なかれ不幸を招くというものである。さらにジュリアは、妾の産んだ子が実母から引き離されて養育される不幸にも触れる⁽⁴⁾。この章以降も、彼女の学校に通う子女の家庭やその周辺で起きた事件を取り上げており、親同士の約束で将来の許婚者を決められてしまった幼子が、夫となる青年の家庭で養育されるために親元から引き離されたことを述べている⁽⁵⁾。

とくに日本女性の地位については、まさに「女三界に家なし」の状況だとして、次のように紹介している。

日本女性の地位は、ほかの異教の国と比べれば高いが、決して望ましいものとはいえない。家庭における女性は、全くの忍従を強いられている。娘は父親の考えに服従しなければならない。日本女子にとって成人になるというようなことはなく、一生が服従なのである。結婚すればしたで、夫や義父に従わなければならない。

未亡人になれば息子に従う。息子が赤坊のときは母親べったりで、小さなほほを母親におしつけて眠り、その言葉は母にしかわからないものだが、いったん成長すれば、母親を馬鹿にするようになる。幸いなことにこのようにはならない例外もある。そういうところでは、家庭生活は純粹で平穩なものになり、女性はあるべき姿でいられるようだ⁽⁶⁾。

さらに、教師をした彼女らしく、「絵と本」という項目がある。日本の絵画には批判的な意見を述べるジュリアだが、日本を知るきっかけになる絵もあるという。「宮廷女性」から「女郎」に至るまで、絵画を通して見る関心はつきない。また、「女郎」についての一文で、子供が親の窮状を救うために苦界に身を落とすことは、日本では孝養を示すものであると紹介している⁽⁷⁾。

また、本について、ジュリアは和綴じ本に関心を示すと同時に、日本の文学は中国文学の影響を受けていることに触れる。女子のたしなみとして教えられた「女大学」についても言及する⁽⁸⁾。親への孝行については先に触れたが、日本の倫理の根幹にあるのは孔子の教えだという。嫁ぎ先の義父母への孝養の大切さ、ならびに姑との不仲や不妊が離婚理由の一つになると紹介した。日本の詩歌にも関心を持ち、「百人一首」やその中の歌人についての言及もある。ちなみに、次に紹介するバードも、旅先の新潟で本屋に立ち寄った際に、文学作品が充実していることに驚き、日本女性の読み物としての、「女大学」や「二十四孝」を取り上げた⁽⁹⁾。また誰もが知っている知識として「百人一首」に言及する。ジュリアの場合は、彼女が滞っていた築地界隈で見聞したものがもとになっており、バードは旅先の新潟での体験であるが、当時日本で普及していた読み物の概要が知られるであろう。

ジュリアの日本の詩歌に関する記述には、日本の和歌を26文字とするような文字数の間違いはあるものの、持統天皇、小野小町、清少納言といった名前も散見される。また、社会制度と文学の関係で江戸時代と平安時代を混同しているようなところがあるものの、そこに書かれている内容から

は、かなり積極的に日本女性に関する文学を調べようとしたことが明らかになる。日本の書店では、ハクスレーやスペンサーなどの翻訳ものさえすでに流布していることに触れるバードとは対照的で、ジュリアの方は、日本には紋切り型の小説や孝養を説く話以外に女性が読める物語が少ないといった指摘が目につく⁽¹⁰⁾。

またジュリアは、児童文学という関心から、日本のお伽噺や民話の紹介もする。「猿蟹合戦」, 「ネズミの嫁入り」, 「桃太郎」, 「金太郎」, 「舌切雀」, そして「花咲翁」などが紹介されている。日本人なら幼少期に何らかの形で触れる典型的な話である。これらの話には善行をつめば幸福が来るが、悪行はその報いを受けるという共通した教訓があるものの、どの話も化け物や鬼が出てきて絵が恐ろしいので子供にふさわしくないと批判する⁽¹¹⁾。ジュリアが眼にしたのは、どのような本であったのだろうか。和書に関しては不明だが、英語版としては英国人外交官 (Lord Redesdale) が A.B. Mitford のペンネームで出版した *Tales of Old Japan* (1870) あたりを読んでいたものと思われる。この本は欧米に「忠臣蔵」を有名にしたことで知られるが、それ以外にも、先に挙げた「花咲翁」, 「舌切雀」ほかのおとぎ話の英訳が収録されている。

いずれにせよ、日本の都市の発展ぶりについてはある程度は評価するものの、アメリカに比べれば、庶民の生活全般にわたってまだまだ改善すべきところがあるという。このような書きぶりはこの書の随所に見られる。『日が昇る王国』がキリスト教長老派の出版局から出され、アメリカ人読者層を対象にしていることを考慮するならば当然かもしれないが、モデルとするキリスト教社会に比べたらということで必ずと言っていいほど日本の状況に注文をつけている。典型的な一例が次の一文である。

…ミッション・スクールができるころ、女子のための公立学校も創設され、外国の婦人が教師として雇われた。鉄道が引かれ、電信も運用が始まった。それまで表に出なかった天皇も姿を現し、多くの迷信が取り払われたものの、聖書なしでは日本は聖なる幸福な国家とはなりえ

ないと思う。

宣教師の信条は、これのみである。すべての民が神の元を離れ、さ迷ってきた。神のもとに戻るには、キリストを通してしかありえないということだ⁽¹²⁾。

また、学校を経営しているジュリアのところに集まってくる女学生を通して感じたのが、日本人学生の従順さである。日本では赤ん坊が大切にされていることを来日当初から強調していたジュリアは、「日本は、赤ん坊にとってと同様、教師にとっても天国だ」と述べており、おとなしく扱い易さがある一方で、自己主張をしない覇気のない学生が描かれている⁽¹³⁾。

最後の Book IV になると、彼女の実体験というより、宣教師が異教徒に接するときの姿勢と心構えを唱えるものとなっている。ただ、彼女の目線の先にはいつも日本女性があった。「女性のための女性の仕事」という章では、日本人と接するための心構えを説いている。異教徒はジュリアらの犠牲的な献身ぶりをほとんど理解していないこと、ならびにキリスト教的な慈愛の心が理解できないこと、時に、キリスト教徒の善意の背景には身勝手な動機があるのではないかと疑って見ることもあることを認識すべきだという。また、日本人の生活習慣にあわせて教えを説くのではなく、キリスト教徒のレベルまで彼らの生活を引き上げなければならないと述べている。それには「クリスチャン・ホーム」の美しさを日本人に見せることが肝心だとして、その一例をあげている。

たとえば、日本女性は宣教師の家に関心を持つから、寝具としてのベッドや清潔で健康的なシーツ、それにプライバシーのあるバスルームを見せることを勧める。さらに、家を開け放しておくのではなく、それぞれが個室を持つことの意義を宣教師の住宅を使って教えようと述べている。当時の日本人にはプライバシーという概念はなく、家長を中心にした一家団欒が基本であったから、そのような日本社会の風潮に風穴を開けようとした宣教師の試みがうかがわれる一文である。後に触れるバードは、医療的観点から農村部の人々に衣服を清潔に保つために洗濯の重要性を説いたが、

ジュリアは寝室やバスルームから清潔で健康な生活を呼びかけようとしているのである⁽¹⁴⁾。

彼女の夫のクリストファー・カロザースのもとで受洗した田村直臣（1858－1934）が、自伝の『信仰五十年史』で、「クリスチャン・ホーム」を作るために妻とともに、着物や日本的なものを捨て去ってアメリカ的な生活を試みたことを述べているが⁽¹⁵⁾、それなどジュリアがここで述べていることと符合する。ジュリア独自の発案というより、当時日本在住の宣教師や聖職者が、家庭経営を任された日本婦人に望んだ姿勢、ならびにその手法がおのずと知られるのである。

イサベラ・バードの場合

本稿で取り上げる三人のうちで、彼女だけが旅行者であった。『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan 2 vols*, 1880）にまとめた旅以外にも、その後、数回来日している。滞在期間はそれぞれ異なるものの、アジア各地の旅の行き帰りに日本に立ち寄っていることからして、バードにとって、最初に訪れた日本の印象は決して悪くなかったことだろう。特に彼女を取り巻く日本人の好意が印象的である。たとえば、一介の旅人の彼女が、久保田では結婚式、六郷では葬式への出席を許されているからである。旅のための準備も周到だったが、このような現地体験を通して学ぶことも大きかった。

ただ、「バード『日本紀行』の解説」の中で、楠家重敏氏は、タイトルである『日本奥地紀行』はパークス公使の発案であるという。バードは日本旅行の中では伊勢神宮が一番気に入っており古い日本が好きだったが、パークス公使のアドバイスを受けて読者をひきつけるためにアイヌ部落探訪を中心とする『日本奥地紀行』にしたという⁽¹⁶⁾。彼女の真意はともかくも、そのたくましさには脱帽させられる。バードの旅の経路や滞在地等に関しては、非常に詳しい先行研究が多々あるので、本稿は、バードが東北や北海道でみた日本婦女子観、ならびに子供観に絞って検証する。

バードは牧師の長女として英国のヨークシャーのバラブリッジに生れた。幼少のころより病弱で

23歳の時に医師の勧めで療養のためにアメリカとカナダを旅行したのが始まりといわれる。彼女の病気は精神的なもので、自分の好きなことをしているときは支障がなく、それ以降五十年に渡り世界中を旅して旅行記を仕上げた。1878年に初来日してまとめた『日本奥地紀行』もそのような作品の一つである。また、彼女の旅行記は、旅先より妹に宛てて書いた書簡をまとめた形で仕上げられている。

彼女の来日理由は諸説あるが、かなり日本のことを調べてきており、日本アジア協会の紀要までつぶさに目を通していたことが考えられる。目的地であるアイヌがすむ北海道までの道のりは、すでに外国人の間で人気があった日光を手始めに、英国人宣教師のいる新潟に立ち寄り、山形、秋田を経て青森まで北上というコースをとっている。来日は1878年、バード47歳のときであった。タイトルどおり、彼女が目指した北海道までの道のりの大半は、観光とは無縁なところが多く、日本人でさえ容易くは出かけないところであった。すなわち、そこには百年あまりの間に消えてしまった、日本の原風景ともいえる東北の農村があった。

また、このような旅ができた背景には日本が安全な国ということもあるだろう。バードは序章で、日本人の召使のほか誰もいない女の一人旅にもかかわらず、ただの一度も無礼な振る舞いや金品を奪われるようなことがなかったことを強調する⁽¹⁷⁾。安全については、バードより10年近く前の日本国内での旅を経験していたジュリアの作品にも、ほかの非キリスト教国とは異なり、旅行がしやすいこと、とくに荷物に鍵をかけなくても大丈夫だという記述があることを付け加える⁽¹⁸⁾。

バードのこの作品で顕著なのは、紀行文でありながら、その視線は女性や子供に向けられていることである。夏ということもあり、貧しい地域の農民の女性が上半身裸のままにいること、また、病んでいる子供などの描写が随所に見られる。現在は、アジア系の女性は実年齢より見た目が若いとよくいわれるが、当時の農村地帯の女性の様相はまったく反対であったことがわかる。バードは、敢えて日本では年齢を聞くことは失礼にはならないと書き添えたうえで、南会津の川島で世話になっ

た家の主婦が22歳だというのに、50歳を超えて見えるという。しかも彼女の子供は5歳になるというのに乳離れていないと書き添えている⁽¹⁹⁾。

日本女性が老け易いことは、どうやら当時の欧米人の間では当たり前とされていたようだ。先のジュリアは、日本人が早く老けるのは、喫煙とお茶を飲むせいだといい、後で紹介するベーコンも、35歳を過ぎるころにはみずみずしさが消えてしまうと述べたうえで、その原因は苦勞と悲しみに耐え続けているからだとしている⁽²⁰⁾。バードの女性は会津の農民、ジュリアは周囲の女性、ベーコンは日本女性一般という対象者の相違があるものの、当時の欧米人の見た日本女性観がうかがわれる。

バードは引き続き、若い嫁達の置かれた状態にも言及する。沼という地域の集落に滞在したとき、耳にした姑の話を語る。嫁は自分の家族を捨てるかのようにして夫の家に入り、夫の父母に孝養を尽くす。それでも子供ができなければ離婚されてしまう。そればかりか、嫁が気に入らないというだけで、姑は息子に迫って嫁を離縁させるのだ。特にバードと接した姑は、嫁を追い出す理由として嫁の働きが悪いことを挙げ、息子に離縁させたという⁽²¹⁾。すでに、ジュリアが一般論として述べていた「女大学」の実践版がここにはあったのである。

その次の黒沢では、上半身裸の女と、皮膚病や眼病の子供が群がっているのをみた。そのような集落の一角で、一休みするバードに水をくれたのは、酔っ払って千鳥足の女だった。そのような女でも、茶代を渡そうとすると辞退し、無理やり手渡した金を従者の伊藤に返してくる律儀さを持ち合わせていた。悲惨な農民の様子を、距離を置いて見ていたバードだったが、決して裕福とはいえない状態の農村の女性が、金を返してきたそのプライドに、はっとさせられた⁽²²⁾。外見だけで判断していた自分に恥ずかしいものを感じたのであろう。欧米人にとって「日本人はしかじかである」というステレオタイプがあって、その枠に当てはめてみようとしていることは否定できない。ただ、彼女の旅は、そのような枠にはあてはまらない人々との出会いの連続であったことも確かである。

前述したジュリアが東京を基点にして活動し、

子供を学校に通わせられるほどの比較的裕福な子女を通して日本の家庭を描写したとは雲泥の差で、バードの観察の対象となったのは当然農村部の女性たちであった。バードは、中でも貧しい女性たちと、目や皮膚病を病む子供たちが気になったのである。このような人々に対し、彼女はできる限り手当てしてやっていることがうかがわれる。

たとえば、川島の宿では、家主の幼い息子の咳止めに、持ち合わせのクロロダイン（麻酔鎮痛薬）を与える⁽²³⁾。このうわさが広がり、集まってきた多くの病人に対し、手持ちの軟膏を与え、皮膚を清潔に保つことを教えて何とかその場をしのぐが、多くの病人はなおも彼女の馬についてくるという描写がある。

同様に、皮膚病に関するものは、青森の碓ヶ関のところにも出てくる。見たところ子供のうちの半数くらいが、頭に皮膚病を患い、眼病のものもいる。彼女は、身体を清潔にすることや洗濯をこまめにするなどの助言を与える。このように感染が広がっているのは、人々が石鹼を使用していないことが原因であると述べている⁽²⁴⁾。実際に彼女が医療を施した例としては、野尻で、のどに魚の骨を刺したままになっていた子供に対し、手持ちの毛糸の編み針を使って、骨を取り除いてやったものなどがあげられる⁽²⁵⁾。

また、北海道の平取のアイヌ部落でも、医療関係の記述がある。5マイル（8キロ）ほど離れたところからバードに見てもらおうと、皮膚病を病む子供を連れてきた一件にはじまり、高熱で気管支炎を患う瀕死の女性にクロロダインをブランデーとともに与えたという記述もある。特に皮膚病の子供の記述では、そのひどさをものともせず、助けたい一心ではるばるやってきた父親の姿に、人種を超えた人間愛を感じるバードであった⁽²⁶⁾。このような出来事を通して、アイヌの人々に対するバードの見方が変わったといえるかもしれない。

その一方で、彼女が親切にアイヌに接することを批判するガイドの伊藤を描くことにより、日本人とアイヌの人々との間に距離があることにも触れた。また、アイヌについて、いくら指示をあたえても二度目にはもう忘れてしまう子供のような人たちと記しているところからは、先にふれたよ

うな普遍的な親子愛に感動した記述との矛盾を感じさせられる。しかし、そのどちらもバードが感じたことなのである。おそらく、直接体験をすればするほど、彼女のアイヌに対する見方には混乱が生じたものと考えられる。

そこにはバードの人間性が見え隠れする。時には、西洋人一般の視点に固執することなく、自分の目で見えて発言しているからである。すなわち、こういう人たち（アイヌの人たち）を相手の医療伝道は余り期待できないが、熟練の看護婦が部落に来れば、適切な薬と食事を取らせることによって、より多くの命を救えるのではないかと述べている⁽²⁷⁾。彼女の視点の先には、厳しい環境に置かれた人々がおり、その救済が優先されると考えたからである。冒頭でもふれたように、外交官以外は伝道が目的の来日であるから、伝道を意識することがあっても何の不思議もないが、ひどい現状を目の当たりにするにつれ、伝道よりは人道的な措置の必要性を実感するのであった。一段高いところからかわいそうな未開の人々を見下ろすような印象は完全にはぬぐえないものの、真剣に救済を模索するところは、それまでの道中行ってきた医療行為や医療に関する発言同様、積極的に奥地の人々と接してきたバードならではのものといえるだろう。

しかし、時として彼女の好意が受け取られないこともあった。ジュリアも宣教師の心構えとして述べていたが、相手が受け止めてくれなければそれが好意からでてきたものであろうとどうにもならないのだった。別の病んでいる子供のために、ヘボン博士から薬を手に入れてやろうと申し出たのに、バードはその父親から日本政府に知られるとまずいという理由で断られたのである⁽²⁸⁾。バードは無知ゆえに彼女の好意が受け入れられないと言って嘆くが、この経験を通して次第にアイヌの人々がおかれた状況、すなわち日本政府のもとで監視されている少数民族の立場にも思いをはせるようになるのだった。

アイヌ部落では、見聞きしたことを日本政府には話さないように口止めされたとも述べている。ただ、バードは、アイヌと日本政府の関係について、アメリカ政府の原住民（インディアン）に対

する取り扱いよりはずっとましという印象をもった⁽²⁹⁾。アジア協会関係の論文に目を通してきたバードは、日本政府がアイヌに対して懐柔策を採っていることもあらかじめ知っていたようだが、じかに接して改めてそのような感想を持ったのだった。

もう一点、女性ということに関しては、バードはアイヌの男性がバードには礼儀正しく親切に接するのに、同じ部族の女性に対してはまったく態度を異にしていることに気が付く。女性としてのバードの目は、ちょっとした行動の中にもその社会に潜む男女の力関係を見逃さなかった⁽³⁰⁾。トラベル・ライターとしてのバードは、読者が関心を持つ内容を描写することに余念がなかったが、それ以上に、同行者であるガイドの伊藤や各地で触れあった人々を通して、文字ではあらわせない部分を感じ取った。西欧においても女性の行動はとかく制約を受けることが多かった時代に、女一人異国の未開の地に乗り込んだバードは、訪問地の女性が置かれた地位についても敏感にならざるをえなかった。

アリス・ベーコンの場合

1878年ジュリアは去り、バードは来日したが、最後は、この二人よりは10年ほど後の1888年に初来日したアリス・ベーコンの作品から日本観、特に日本女性観を概観する。ベーコンは二度来日しており、『日本の少女や婦人たち』(*Japanese Girls and Women*, 1891改定版は1902)と『日本の内側』(*The Japanese Interior*, 1893)を出版した。前者はまさにタイトル通り、明治のいろいろな階層の女性たちを描き、後者は華族女学校教師として生活するために一軒構えたベーコンが、日常生活の中で見聞きした日本の生活風景が日記形式で描かれている。

アリス・ベーコンはここで紹介した中では最も若い。初来日した年齢においてはすでに30歳になっていた。コネティカット州ニューヘイヴンの会衆派牧師の家に生れたベーコンは、異母姉が校長を務める学校で黒人学生に出会い、さらに自宅はホスト・ファミリーとして日本からの女子留学

生の一人である山川捨松を受け入れたことから、黒人問題や異文化の問題に逸早く目を向けることになった。

先にもジュリアの項で触れた田村直臣は、アメリカで日本女性に関する書物 (*The Japanese Bride*, 1892) を出版したが、その出版理由は、日本女性を描いて話題になった三作 (ピエール・ロチ, アリス・ベーコン, エドウィン・アーノルド) への批判から、中流階級の日本女性を描きかかったからだという。

田村がなぜベーコンらの名前を出したのかには背景がある。田村が、アメリカで出版した本を、『日本の花嫁』のタイトルで日本語に翻訳して出版したとき、聖職者のトーマス・クック夫人が他誌で発表した田村批判の記事を、『ジャパン・ウィークリー・メール』が取り上げたことが発端だった。この記事を受けて田村は、反論を『福音新報』129号で試みた。そこでベーコンの女性論は上流階級の婦人のみを扱っているとしたのだ⁽³¹⁾。

その後、田村の著書は「日本人の恥を海外に知らせる不謹慎なもの」として、日本基督教会から牧師の職を解かれる「花嫁事件」にまで発展した。田村の著作に書かれた日本婦人の結婚に始まる悲惨な家庭生活の様子は、ベーコンの『日本の少女や婦人たち』に描かれたものと大変似ている。とくに、御隠居になって、若い時の悩み多き結婚生活から解放された女性が晩年を静かに暮らすさまなどは、ベーコンのものを彷彿させる。

実はベーコンの本もアメリカ人には好評だったが、日本では批判が起りそうになったといわれる。この本の完成には津田梅子の協力があつたために、日本にいる梅子を苦境に立たせる恐れがあつたとのことである。ベーコンは自分の責任で書いていることを言明し、梅子に批判が向けられることを回避しようとしたという⁽³²⁾。ベーコンの日本社会を描写した作品への批判の論理は、田村批判と根を同じくするものであろう。

ではベーコンは日本をどうとらえたのか。『日本の内側』からは、ベーコンは自分の召使たちの間での人間関係や、彼らの自分に対する対応の仕方から、日本人というものを見た。特に彼女が関心を持ったのは、ヤサクという使用人の行動だっ

た⁽³³⁾。

ベーコンは、人の良いヤサクという下男に焦点を当て、彼の結婚の作法から日本の下層階級の結婚を概観した。物を調達するように妻となるべき人を他人に見つুকろってもらふ日本の結婚のあり方は彼女の想像を絶するものであった。

ベーコンは、下層の住民の間で行われている結婚のあり方に対し、男女それぞれが相手に対して特別な感情を抱くのもなく、あまりにも人間味にかけるといふ感想を持つ。上流階級なら、もう少し作法の問題があるから、複雑になるだろうが、日本の結婚・離婚はヤサクの例にみるように西洋人が思い描くものとは違っていた。とくに女性は不利な立場に置かれている。子供がいれば、親権は父親にあって、母親は離婚理由が何であれ、子供に対しては何の権利もないという。ベーコンは、女性の意思があまりに軽んじられている状態、ならびに日本の母親の無力さを強く訴えたのである。

ヤサクの嫁探しの話は、親戚が嫁となる女性と共に上京してくるまで続く。このヤサクの話は、『日本の少女や婦人たち』の中でも「結婚と離婚」の項で取り上げられており、借金までして結婚式をあげたものの、他人任せで伴侶を選んだために、結局別の女性を探し始めたことが述べられている⁽³⁴⁾。

『日本の少女や婦人たち』のベーコンの眼は、あらゆる階層の婦女子へと向けられるのであった。都市と田舎など、カテゴリーを設けて論じているが、前半では、子供と結婚、既婚者、また直接携わった女子教育などに熱弁をふるう。その中には、前述したジュリアやバードと重なる視点がいくつか見られる。共通する事項に対し、ベーコンがどのような反応を示したのか概観する。

赤ん坊の子守はベーコンも注目するところだった。誰かに背負われて過ごす子供は欧米人の目を引いた。たとえば、ジュリアは子供が自分と大して変わらない大きさの赤ん坊をおんぶする姿をとらえ、「頭が二つある子供」⁽³⁵⁾と書き、遊びに興じる子守の子供が赤ん坊に与える危険を述べた。一方、ベーコンは20世紀初頭の東京では乳母車の出現で、子育てにも変化が訪れようとしていることを特記する。ただ、金持ちや上流階級を除いて、

家事をこなす必要がある日本女性にとってのおんぶの意義は認めている⁽³⁶⁾。

おんぶに加え、彼女の目を引いたのは母乳の問題である。日本の子供の乳離れが遅いのは母乳のせいだという。離乳食がないため、普通の食事ができるようになるまで母乳に頼るから、乳離れが遅いという⁽³⁷⁾。先に、バードが、老けて見える若妻の子供が5歳になるというのに乳離れていないことを指摘していたことにもつながるであろう。

さらに、ベーコンは日本の子どもに皮膚病が多いのは栄養不足が原因だとし、授乳に頼らず、普通食が取れるようになれば皮膚病は治ると述べる。バードは、農村部で皮膚病を病む子どもの多さに衛生面の向上を説いたが、ベーコンは母乳に着目した⁽³⁸⁾。

さらに、ジュリアもバードも「女大学」に言及しながら、耐える日本女性を描いたが、ベーコンは表現こそ異なるものの、男性の庇護のもとにおかれる日本女性に触れている。専門職に就くこともなく、常に、父、夫、息子に依存する生き方を紹介する⁽³⁹⁾。ベーコンが強調するのは、知性を磨いても幸せになれない女性は、子供のころから自分の気持ちを抑えることを学ぶということである。良くなることを望むのではなくあきらめることを学ぶ日本女性に着目したのだった。

前述した御隠居さんの老後の安楽な暮らしなどをみても、消極的な解決方法と呼ばざるをえない。現実をどうにか回避して生きるしかない日本女性に、同性としてのベーコンは、一種の歯がゆさを感じるのであった。これには、せっかく十年を超すアメリカ留学を体験してきた梅子たちでさえ、帰国後の仕事探しは困難をきわめ、果ては結婚に代表される社会のしがらみに押しつぶされそうになる現状からも、容易に想像がつくことだった。それと同時に、先に触れたように梅子の積極的な協力なくしては、到底このような日本女性を取り巻く社会事情を見つめ、彼女らの声を救いあげることなどできなかったのである。

当時の日本社会では男性より低い地位にあった女性、あるいは女性と共にいる年端のいかない子供に焦点をあてたことから、見えてきたものがあった。表立った活動をする日本人男性とは異なり、

常に日陰の部分を支えていた女性に注目し、その家庭生活に目をやると、予期した以上に社会の矛盾や男女差が表面化したことだろう。そういうものに、ベーコンは真正面から取り組もうとしたのだった。

ただ、欧米人でクリスチャンである彼女らの発言には、日本人が改宗すればより良い社会が築けるという前提も随所にみられる。ジュリアはおろか、バードもアイヌ部落で同様に感じ、ベーコンも『日本の少女と婦人たち』の増補版では、キリスト教化の進展に期待した。教育や科学の知識、特に衛生観念など、彼女らが説く内容には、当然耳を傾けるべきことが多いことは疑わないものの、この論理一本で、日本を変えることなど不可能だった。

ただし、ベーコンに関して言うならば、日本の良さが気がつくにつれて、キリスト教化すれば問題は解決するという、自分のこれまでの姿勢に疑問を感じたこともあったようである。ベーコンだけでなくグリフィスやほかの欧米人も日本を知れば知るほど、アメリカの定義する「文明」をそのまま受け入れることがはたして日本人に幸せをもたらすのか、疑問を持つようになっていったらしい。ベーコンは日本での教師生活を経験した後、「文明」をどう解釈していいのかわからなくなったことを告白している。即ち、日本の貧しい階級の人々でさえ美を愛する心を持ち、道徳的であるところをみると、「文明化する」(civilize) 必要があるとは到底思えなくなってしまうのである。そして、「文明」がキリスト教徒としてのアングロ・サクソン人の専売特許であることに疑問を感じるようになっている⁽⁴⁰⁾。

このあたりが他の二人、特にジュリアとは異なるところと言えるだろう。もっとも、キリスト教のモラルによる教化を使命としたそのジュリアでさえ、京都の芝居小屋に行ったとき、俳優はおろか、日本人観客のマナーの良さを認めざるをえなかった⁽⁴¹⁾。ましてや、ベーコンの来日の目的は、日本女性の地位向上のために適切な教育を施すことにあったから、教育を通して日本人のモラルの高さに気付くことも多かったことだろう。結局、これまでの歴史の中で、教育を根付かせるだけの

しっかりした土壌がすでに育まれていることを確認するに至ったのである。

おわりに

これまで、英米の三女性による作品から、特に日本女性や子供に対する発言を取り上げて検討してきた。すでにジュリアが来日したころには、ミッション・ボード系の雑誌で日本女性を取り上げられ、またバードが資料として使用したように、各地のアジア協会の日本研究も充実し始めていた。しかし、ここで取り上げた女性は、滞在の長さや動機などそれぞれ異なるものの、単独で日本人と触れ合い、その経験を書物にまとめた。

最初のジュリアは、ミッション・ボードそのものの日本人に対する姿勢が定まっていない時代（夫の辞任の遠因がJesusの訳が「ヤソ」か「イエス」かの論争で敗れたこと）に来日し、教育と改宗に尽力した。前述のクララの記事にあるように、教会では日本語を交えて教えるような状況であった。それだけに、教え子である日本女性を通して眺めた日本女性観は、当時の宣教師特有の論理が働いて、一見オリエンタリズム的印象がぬぐえないものの、日本の良いところも分かり始めていたといえるだろう。ただ、それを認めることは、日本人を改宗させる目的と相いれないために、敢えて無理をしているとも思われる。

また、バードの紀行文は、滞在期間の短さにもかかわらず、医療を通じて閉鎖社会に入ることにより得られた情報などに彩られている。おそらく、長旅の健康管理のために、自分用にと持ちだした医薬品が功を奏したといえるだろう。長くても同じところに数日という、限られた条件内での交流にしる、「医療」に近い行為を提供することによって、より多くの日本人の生活の内側を見出すことになったのである。また、相当貧しい地域であっても人々は尊厳をもって暮らしていることを思い知らされる。第一このような旅を安全に遂行できたということ自体が、日本がすでに秩序ある社会を確立していた証であることを、バードはおろか、時折旅したジュリアも実感したはずである。

最後のベーコンの書は、三人の中でも最も充実

した日本論となっている。それにはすでに言及したように、アメリカ時代からの知人であり、日本での仕事のパートナーである津田梅子の存在が欠かせない。留学から帰国したものの、アメリカで受けた類まれな教育経験を活かそうとしても活かす場が見つからないというのが当時の状況であった。梅子自身が職探しをはじめとして、日本人でありながら日本社会への同化の厳しさを、その身をもって体験した一人であったことに他ならない。それは、外国人が体験するカルチャー・ショックと根を同じくするものであった。

このように三者三様の日本論ではあるものの、それぞれが、それぞれの目的を持って日本人に接することにより、当時の日本女性がおかれた状況を赤裸々に映し出すことになった。さらに、取り上げ方や表現の仕方に相違はあるものの、問題としてとらえた内容においてはほぼ共通している。日本の伝統に目をやる欧米人男性は、日本女性も伝統美の一端であるかのように、変わらぬこと自体に価値を見出そうとする向きがあった。しかしここで紹介した欧米人女性は、彼女ら自身が所属する欧米社会にあって、女性の関わる問題を意識してきたことから、日本女性に対しても意識の高まりを求めている。

特に、未婚時代は教育や結婚の問題、結婚してからは家庭経営と育児において、西欧社会と比べると大きな相違があることを日本人に理解させようと腐心した。そういう女性ならではの視点に立って描いているのがこれらの日本論である。その点、男性が描いた日本論にはみられない助言や感想も散見された。その中には、改革と称して、欧米のキリスト教的価値観をおしつける向きもあり、いわゆる「オリエンタリズム」の一例と考えられるような表現もある。そうはいうものの、すでに触れたように、ベーコンの場合、日本人の長所を見出すにつれ、欧米一辺倒に疑問を感じ始めていた様子がみうけられる。一方のジュリアは、礼儀正しい日本人に対し心は動くものの、その都度努めてキリスト教的価値観にたちかえろうとしている。そういう心の揺れが作品中に見え隠れしていることも否定できない。いずれにしても、男性なら見落としてしまうような側面から、等身大の日本女

性が、同性の目を通して描き出されたという点で、その意義は大きいといえるだろう。

注

- (1) 中島耕治「ジュリア・ドッジ・カロザースー女性のための女性の仕事」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』38号（2006）。小檜山ルイ『アメリカ女性宣教師』（東京大学出版会，1992）190-91.
- (2) Julia D. Carrothers, *The Sunrise Kingdom; or Life and Scenes in Japan, and Woman's Work for Woman There* (Philadelphia: Presbyterian Board of Publication, 1879) 146-52.
- (3) Carrothers, 72.
- (4) Carrothers, 72.
- (5) Carrothers, 300.
- (6) Carrothers, 73.
- (7) Carrothers, 100.
- (8) Carrothers, 104.
- (9) Isabella L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan : An Account of Travels on Horseback in the Interior including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikko and Ise Vol. I & II* (N.Y.: G.P. Putnam's Sons, 1881) 1880年初版の再版。以下これを使用。
- (10) Carrothers, 109.
- (11) Carrothers, 127.
- (12) Carrothers, 194.
- (13) Carrothers, 354.
- (14) Carrothers, 329-30.
- (15) 田村直臣『信仰五十年史』（警醒社，1924）171-73.
- (16) 楠家重敬，橋本かほる，宮崎路子訳『バード日本紀行』（雄松堂，2002）359-60.
- (17) Bird Vol. I, 8.
- (18) Carrothers. 357-58.
- (19) Bird Vol. I, 173.
- (20) Alice M. Bacon, *Japanese Girls and Women* (London: Gay & Bird, 1905). 122. 1902年の改定版の再版。以下これを使用。
- (21) Bird Vol. I, 252-53. この後の久保田での結婚式に出席した記事の末尾には「女大学」と思われる女性の修身について述べた18カ条がある。Vol.I, 323-335.
- (22) Bird Vol. I, 254-55.
- (23) Bird Vol. I, 169-70.
- (24) Bird Vol. I, 372-73.
- (25) Bird Vol. I, 187-88.
- (26) Bird Vol. II, 63.69-70.
- (27) Bird Vol. II, 70.
- (28) Bird Vol. II, 71.
- (29) Bird Vol. II, 71.
- (30) Bird Vol. II. 72.
- (31) *Japan Weekly Mail* (1893.7.4) が，Joseph Cook 夫人が *Our Day* に書いた，田村直臣の *The Japanese Bride* に対する批判記事を取り上げた。この記事によると，クック夫人は，エドウィン・アーノルドやベーコンらを引き合いに出して田村批判に用いたことから，田村は，『福音新報』129号（1893.9.1）にて，アーノルドやベーコンの書の内容に言及しながらクック夫人に反論した。
- (32) 高橋裕子『津田梅子の社会史』（玉川大学出版部，2002），149.
- (33) Alice M. Bacon, *A Japanese Interior* (Boston & N.Y.: Houghton Mifflin, 1893) 149-50. 169-72.
- (34) Bacon, *Japanese Girls and Women*, 69-73.
- (35) Carrothers, 294.
- (36) Bacon, *Japanese Girls and Women*, 7-9.
- (37) Bacon, *Japanese Girls and Women*, 10-11.
- (38) Bacon, *Japanese Girls and Women*, 11.
- (39) Bacon, *Japanese Girls and Women*, 17-18.
- (40) Bacon, *Japanese Interior*, 228. Joseph M. Henning, *Outpost of Civilization* (N.Y.: New York University Press, 2000) 72.
- (41) Carrothers. 260.